



車いすバスケットを見たことはありますか？ かなり激しいスポーツです。車いすどうし激しく当たり合いますし、タイヤの焦げるにおいもします。



## ハンディキャップをもつ人との関わりについて

総合の学習で、福祉について取り組み、子どもたちと障害をもった方々との交流の授業を企画したことがあります。あるグループは目の不自由な方と、あるグループは車いすで生活している方と…。

目の不自由な方のお宅での生活の様子を知りたいという希望のグループがありましたので、市の社会福祉協議会にお願いして、Sさんを紹介してもらいました。お宅にお伺いする許しをいただき、私も一緒に訪問させていただきました。

そのお宅へ伺うと、庭で洗濯物を干している方がいました。Sさんにお話を伺いに来ましたとお願いすると、その洗濯物を干していた方が、「よく来てくれたね」と玄関に招いてくれました。居間に通していただき飲み物やお茶菓子を出していただき、その方がちょこんと座りました。私が「Sさんはおいでですか？」と尋ねると、その方が「私がSです。」と言われました。「いえ、目の不自由なSさんにお話を伺いに来たのですが？」とさらに尋ねると「私がそのSです。目は全然見えていません。」と言われました。子どもたちも私もそれこそビックリしました。洗濯物を干している姿、玄関に小走りに入っていく姿、お茶やお菓子を出してくれる姿を見て、目が不自由な方だとは全く思わなかったからです。

子どもたちがあらかじめ用意してきた質問をしました。「目が不自由で何か困ることはありませんか？」この質問にSさんは、「何の不自由もありません。」とあっさり答えられました。加えて「私は畑もやりますし、料理もします。家の敷地の中にいる限りは何の不自由もないのです。」と言われました。ただ、敷地を出てどこかに行くとなると、一人では歩けないという話も付け加えられましたが…。

私も驚きましたが、子どもたちの驚きはもっと大きかったようです。目の不自由な人に出会ったら、「助けてあげる」とか「手を貸してあげる」などと優等生的（語弊があります）な考えをもっていた子たちでした。いわば、障害をもった人に対して上から目線で考えていたのです。ところが、子どもたちは、Sさんと出会って、「目が不自由なのに、普通の人と同じ生活ができるすごい人」と尊敬のまなざしに変わったのでした。

別のグループが、車いすで生活をしているKさん方のお宅に伺ったときも、子どもたちは同じ質問「何か不自由なことはありませんか？」をしました。これに対して、「別に何の不自由もありません。」とKさんも同じ答えでした。逆に「返って目立ってカッコイイでしょ。」と言われて子どもたちは唖然としていました。買い物に行くとき高いところのものが取れなくて困るという話も付け加えてくれましたが、それは身長が低い子どもたちも感じていることですから、子どもたちは障害だとは考えませんでした。



教頭になる前年は、6年生の担任をしていました。その学年の特別支援学級の所属に自閉症で人とうまく関われないHくんがいました。運動会の組立体操では、そのHくんと私で2人組に取り組みました。3人組以上は何とかHくんでも参加できるのですが、2人組は1人が1人を持ち上げますので、ネックになるワザなのです。Hくんは組立体

<サポテンの図>

操では土台になる体型でしたが、学年でいちばん体重の軽い子でも肩車ができなかったので、私がHくんを持ち上げる役を買って出て、肩車やサボテン、倒立などに取り組みました。1学期のうちから時間があれば練習しました。その前の年は、教務主任でしたので、私は組立体操に関わることはできませんでしたし、またHくんを組立体操にどう参加させたらいいのかと悩んでいたため、チャンスが来たと取り組みました。人とうまく付き合えないHくんでしたが、私には親しんでくれていたため、Hくんだけががんばってみんなと同じことができるんだと見せてやりたかったのです。その練習の様子は多くの子どもが見ていましたし、Hくんを励ます子、けっこう体重のあるHくんを持ち上げる私の腰をいたわってくれる子もいました。

運動会本番は、Hくんのがんばりと、もう少し若かった私の体力が合わさって、ノーミスで2人組の演技を終えました。運動会終了後、学年全員の前で、この運動会で一番がんばったのはHくんかもしれないと話をすると、子どもたちは全員が納得していました。

運動会以外の場面でも、私が担任した子どもたちはHくんと関わり、Hくんから多くのことを学んでいました。また、Hくんも他の子どもたちと交流することで多くのことが学べたと思っています。

本校には、特別支援学級が4学級あります。幸いなことに、すべての学年が特別支援学級に所属している子どもたちと交流することができています。本校の子どもたちすべてが、まだまだ発達段階半ばの子どもたちですので、お互いの個性や特性を理解し合い、認め合って交流し、成長していけるよう取り組んでいます。また、お互いがお互いから学び、配慮し合って、尊重し合って交流していけるよう指導・支援しています。

**障害は不便である。**

**しかし、不幸ではない。**

ヘレン・ケラー



有名なヘレン・ケラーですので、私の余計な注釈はいらないかと思いますが…。

ヘレン・ケラーは1歳で高熱に伴う髄膜炎より、一命は取りとめたものの、聴力と視力を失い、話すことさえできなくなりました。しつけもできない状態となり、非常にわがままに育ってしまいました。家庭教師として派遣されてきたアン・サリバンが「しつけ」「指文字」「言葉」を教え、ヘレンはあきらめかけていた「話すこと」ができるようになりました。サリバンはその後約50年に渡り、よき教師、そしてよき友人としてヘレンを支えました。日本では「奇跡の人」というタイトルでサリバンとヘレンの話が紹介されています。

前号で書かせていただいた「合理的配慮」について調べていたときに、こんな文章を見つけました。大学の先生の言葉です。

授業中に大量の段ボールを運ぶ必要があった。授業に来ていた学生の男女に、運ぶことをお願いした。みんなで協力して何度も往復して運び出しを行っているとき、ある一人の男子学生が早々に自分の席に戻りスマホをいじりだした。

「どうしたの？」

とまだ段ボールが残っているのにどうしてやめるんだと思い、歩み寄った。すると彼は

「もう俺は〇個運びました。人数で割ったら一人〇個ですよ？ っていうか、女子が運んでなさすぎじゃないですか？ 逆差別ですか？」

と前のめりで言った。とにかく、人間が小さい。平等を盾にした怠惰であると感じた。

【平等】特に「男女平等」ってこういうことではないですよ…。